

トランスジェンダー をいきる (22)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

セルフヘルプグループへの参加

1 始めに

筆者は2008年現在、身体・書類上の性別は女性・ジェンダーの性別は男性と言うFTMトランスジェンダーの当事者に会ったことがなかった。そこで筆者は、ジェンダークリニックへの受信を始めた2008年、ある友人に誘われて、性同一性障害・トランスジェンダーに関するいくつかのセルフヘルプグループに参加した。今回は、筆者が参加したいくつかのセルフヘルプグループを通して、当事者としてどのように生きていきたいかを模索しながら、セルフヘルプグループの持つ問題点についても記述する。

2 医療化された「男」と「女」の身体

① 生態観察で思い知らされた、「ホルモンの威力」に圧倒されて

鍼灸マッサージ師免許を取得している筆者は、性ホルモンの機能に関する知識はそれなりにあったものの、性同一性障害・トランスジェンダーの当事者たちで、ホルモン投与や手術などの医療行為を受けている当事者たちに会ったことがなかった。特に、性ホルモンを投与している当事者たちと会話しながら、身体のアチコチを観察していると、自己のそれまでの医学的知識や想像を絶するほど、ホルモン作用の威力に圧倒された。すなわち、FTMは男声化、無月経、筋肉質の体型、髭、太い眉、MTFはきめ細やかな肌、細い髪、丸みを帯びた体型、軟らかな筋肉などがそれぞれ際立った特徴として、筆者をうならせた。ただし、ホルモン作用は個人差によって異なるし、MTFの当事者は、女性ホルモンを投与しても、女声化は起こらない人が多い。

そのような生態観察は、筆者にとってはコミュニケーションツールとしての役割を果たした一方で、通院当初で、ホルモン投与や手術などの医療行為を望んでいた自己の心を流行らせ、まだ何も医療行為を行っていない自己の身体を、「この人たちより劣った存在」として、自ら貶めてし

まうような心理状態に陥ってしまった。

そして、医療行為によって男女のカラーが際立っていた集団への帰属意識をかき立てられるように、将来、自己の身体への男性ホルモンの投与による体型の変化を、青写真に描くようになった。もちろん、男性ホルモン投与による副作用を覚悟の上でのことである。

②筋トレの効果によるホルモン投与や手術への微かな違和感

筆者は、セルフヘルプグループで、ある FTM の友人から、筋トレを勧められた。最初は、筋トレに対して乗り気ではなかったが、ここは一つ、「男らしくチャレンジ」と思い、筋トレを始めた。その筋トレで、当初予想していたよりトレーニングの効果が出てきたこともあってか、それまで望んでいたホルモン投与や手術などの医療行為への微かな違和感を覚えるようになった。それと同時に、医療行為によって構築された男女のカラーが際立っているセルフヘルプグループの人たちの中で、なんとなく中性的な自己の身体が「空気を読めない」というように浮いた存在になっていたことへの違和感をも覚えるようになっていた。。

3 ジェンダー役割の確認は、そのまま異性愛規範へ

①セルフヘルプグループ内で押し付けられた「男らしさ」への違和感

宿泊をかねた飲み会でのことである。真夜中、たまたま筆者の横に座っていた MTF の彼女からいきなり「抱いて」と迫られた。その迫り方は、女性の色をふんだんに使用し、身のこなし方も、FTM の筆者を誘惑しようとする動きであった。ところが筆者は、女性嫌悪という性質上、彼女の求婚をすぐには受け入れられなかった。そのような筆者に対して、彼女は「男としての女の抱き方」を教えようとした。その彼女の行為に、筆者はジェンダーの男としてのプライドを傷つけられた。彼女にしてみれば、視覚に障害のある筆者にわざわざ親切にも「男としての女の抱き方」を教えたつもりであったのだろうが、筆者にしてみれば、女が誘惑するように男に迫ってくる、そのこと自体に嫌悪を抱き、しかもそれをジェンダーが男の筆者に「押し付ける」という行為にも反発したのである。

この出来事から浮かび上がってきたことは、「男は女を抱くもの」というジェンダー役割を内面化していた彼女からの要請への筆者の反発であり、「彼女の要求する男らしさを押し付けられたことへの憤りであり、それはそのまま異性愛規範へと連動している証である。そこには「女は男に抱かれるもの」というジェンダー役割に固執した彼女が、女を積極的に抱きたがらないジェンダーが男の筆者へのもどかしさの故、「男としての女の抱き方」を筆者に教えることで、男としてのジェンダー役割を、筆者により強固に押し付けようとしている戦略的方法が見て取れ、その影には異性愛規範がベースになっている。したがって、彼女の発想からは、「女が男を抱く」というジェンダー役割の逆転化や、「男同士・または女同士で抱き合う」などの同性愛的関係性への想像が欠落しているといわざるを得ないだろう。

②自らゲイであることに明確に気づく

場所や地域を問わず、FTMのセルフヘルプグループでの話題は、ほとんどが異性愛規範に基づいたジェンダー役割の確認、つまり、「彼女がいることが前提」で話題が盛り上がる。FTMを対象にしたこの日の自助グループの場でも、ご多分に漏れず、異性愛規範に基づいた恋愛の話題で持ちきりで、ここでも集まった当事者すべてに「彼女がいる」という前提で話題が勧められていった。

そんなとき、筆者一人だけが話題から取り残されていることに気づいた。その原因が何であるかにうすうす気づいていた筆者は、前夜一睡も眠れなかったせいで、突然眠気に襲われた。しばらく夢の中で、当事者たちの恋愛話を聞いていたとき、リーダーの「彼女おるんか」という質問にはっと目覚めた。そこでいきなり、前夜一睡も眠れなかった理由を話した。

前夜、集まりの帰り、ゲイの彼が筆者をバス停まで誘導してくれた。そして別れ際、無言のまま、いきなり彼が筆者にハグをしてきた。ゲイの彼からハグをされるのは初めて、ましてやFTMトランスジェンダーとして生きようとするなら、やっぱり女を好きになった方がよいのか、それとも男が好きなままでもよいのか、と迷っていた最中だけに、筆者はそれに応じながらも、内心ショックを受けた。そのショックは一晩筆者を眠りに陥らせないほど強いものであり、結局そのショックに悶々としながら一夜を明かした。

しかし、このことを冷静に考えてみると、筆者がショックを受けたのは、ハグをしたゲイの彼を否定したのではなく、彼がいきなりハグの行動に出たからである。確かにそのショックによって一睡も眠れなかったのだが、彼がいきなりハグをしたということは、筆者をFTMトランスジェンダーであることを認めた上で、筆者を男として扱ってくれたことへの証であろう。そのことを全員の前で話すと、リーダーから、「孝ちゃん、もしかしてゲイか？」と聞かれた。このとき筆者は、自らゲイであることへの明確な気づきを得た。その気づき方は、今までのぼんやりとしたおぼろげな、何か容認しがたいフォビアの様相ではなく、フォビアのないはっきり容認した形での気づきであった。そして、この気づきによって、今まで恋愛または恋愛感情に陥った際の複雑なねじれ現象を回避すべく自己のあり方に対しても腑に落ちた。

また、ジェンダーレベルで自己のゲイであることへの気づきを得たときのFTMのセルフヘルプグループ全員からのからかいや誹謗中傷がなかったことが、自己のジェンダーレベルでのゲイを恥じることなく容認できたのだろう。そのことによって、今までに体験した男たちとの恋愛の際に生じた苦しみの意味を見出すことができた。そこには、他者がゲイであることは容認できても、自己のジェンダーレベルでの性嗜好がゲイであることへのフォビアによって、恋愛を「ねじれた忌むべき感情」へと低次元化しつつも、その恋愛に格闘技としての意味を付与した上で、自己の男性性を鼓舞するために嗜癖的に繰り返すというメカニズムに陥ってしまうプロセスが、無意識のうちに自己のジェンダーレベルでのゲイを否定していることにも気づかされた。

このような気づきを得たうえで、セルフヘルプグループでは、「恋愛は極力避けたい」と発言している。FTMトランスジェンダーのセルフヘルプグループの話題は、異性愛に基づいた恋愛話が多い中、このような発言は、ともすればセルフヘルプグループの場を崩壊させるような逸脱的な

発言に思われるかもしれない。しかし、「言いつばなし」、「聞きつばなし」という性質の濃いセルフヘルプグループであれば、この発言も場を崩壊させるものではないだろうと考えている。

4 通常の視聴覚レベルでの性別規定はタブー

①視聴覚レベルの性別規定は、当事者自身の性自認より効力がない

私たちは、初対面の人と会ったとき、必ずと言ってよいほど年齢と性別を規定したくなる。その判断材料は、視聴覚レベル、特に視覚に特化した外見であろう。中でも性別は、服装や持ち物、行動様式などから瞬時に規定できると思い込んでいる人が多く、他者の性別を無意識に規定し、その規定した性別に無理やり他者を当てはめようとする強引さ、つまり、自分たちの勝手なものさしで、他者の性別を無意識に規定し、無理やり他者を押し込めようとしていることに、ほとんどの人が気づいていない、いや、気づこうとしていない。そればかりか、自己の勝手な判断で他者の性別を規定していることに何の疑いを持っていない人が大半であるだろう。

しかし、そのような他者への性別規定が、必ずしも自明でない場がある。その一つが、性同一性障害・トランスジェンダー当事者のセルフヘルプグループである。

性同一性障害・トランスジェンダーのセルフヘルプグループで、視聴覚レベルで当事者の性別を規定したとき、100パーセント当たらないばかりか、場合によっては他者からの一方的な性別を規定されたことへの怒りを露にする当事者もいる。つまり、このセルフヘルプグループでは、視聴覚レベルによって、他者の性別を規定すること自体タブーなのであるといえるだろう。そこには、個々の当事者がそれぞれの性自認に合わせた服装や行動様式を身に付けることで、その性別で日常生活を送りたい（その性別としてパスしたい）、決して外見の身体の性別で規定されたくない（リードされたくない）という強い姿勢が伺えるからである。

それに、性同一性障害・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加している当事者は、必ずしもホルモン投与や手術などの医療行為を受けている人ばかりではなく、かえって医療行為を受けることに否定的な当事者もいる。ホルモン投与や手術などの医療行為によって、視聴覚レベルで個々人の希望する性別と一致した性別規定が可能な人もいれば、医療化を否定しながらも、身体の性別だけで、性別を規定されたくない当事者もいる。つまり、医療行為を否定しているからといって、身体の性別を容認しているわけではない。したがって、性同一性障害・トランスジェンダーのセルフヘルプグループ内での視聴覚レベルによる性別規定は、個々の希望する性別で生きようとする当事者の努力を踏みにじる行為であるばかりか、当事者自身の性自認より効力がない。

②性自認の表明は自由

前項で述べた、視聴覚レベルでの性別規定は、当事者の性自認より効力がないことを受けて、では、当事者全員が性自認を表明するかといえばそうではない。積極的に個々人の性自認を表明する人、話の流れの中で、徐々に性自認表明を思わせるような発言をする人、まったく性自認を表明しない人などさまざまである。したがって、自助グループ内での性自認の表明は自由である。

性別は、極めてプライベートなことである。そのプライベートな事柄である性別を、視聴覚によっていとも簡単に規定してしまうこと自体タブーである。だから、性自認の表明においても、わざわざプライベートな性別をむりやり表明する必要はない。また、このことは、「性別をカテゴライズされたくない権利」を保障する重要な要件であると筆者は考える。

③男女どちらでもない性自認

男女のカラーが際立っている当事者の中で、必ず一人は、男でも女でもない性別、すなわち、身体は男性（女性）でありながら、ジェンダーは男女いずれでもない性自認を有する人たちがいた。この当事者たちがもっとも嫌悪する質問は、「あなたは男女どちらですか？」である。一見自明のことと思われているこの質問に、なぜ当事者たちは嫌悪するのか。

私たちが他者の性別に関する質問を行う際、「男性」と「女性」の 2 つの選択肢しか用意していない。これは、性別に関する直接口頭での質問だけでなく、書類の性別記入欄にも、男女のいずれかに印を付すような様式がまだまだ多い。仮に、性別欄が男女 2 つに区分されていなくても、性別欄があるだけで、男女いずれかを記入しなければならない恣意的な物さえ感じてしまう。そこには、無意識の内に内面化している性別二元性が、このような質問を生み、書類に性別欄を設け、強制的に記入させる構造を作ってしまうのだろう。

また、この手の質問には、男女いずれかの性別で答えなければ許されないという厳格さまで含んでおり、そこには「男女いずれでもない性別」という答えはあいまい、または「中性」などと揶揄した上、却下することも多い。しかし、セルフヘルプグループに参加して分かったことは、男女という性別二元論だけでは収まらない領域、つまり、男女いずれでもない性別で生きている当事者たちがいたという事実であった。だから、性別二元性を背景にしたこの手の質問は、男女いずれでもない性別で生きている当事者たちを困惑させるだけではなく、性別をカテゴライズされたくないという権利保障、更には、性自認を表明しない自由までも奪ってしまう性質を持つ残酷な側面を持っているといわなければならないだろう。それゆえ、セルフヘルプグループの中では、性別に関する質問を却下する空気が伝わってくるし、「性別は身長や体重をむやみに聞くことと同様にプライベートな事柄）として意味づけた上で、「それを聞かない、ましてや視聴覚レベルで勝手に規定しないこと」を暗黙のルールにしているのだろう。

④社会への課題

このような状況を受けて、筆者はあえて社会に次のような課題を提示する。他者の性別を勝手に規定することはタブーである。それはもとより、むやみに他者の性別を問わないこと、すなわち、性別とは身長や体重と同様、プライベートな事柄であるから、性別に関する直接口頭での質問や、各種書類記載などに、不必要に性別欄を設けないことである。「性別は個人を特定するのに必要だ」という認識を持っている人が多いが、そもそも男女という 2 つだけで、個人を特定できるはずがない。個人を特定したいなら、実際には男女以外の多様な性別が存在していることを容認する必要がある。この手の内容は、4 つの血液型の特徴を定め、それに無理やり他者を押し込

めていることと同様の原理を持つ強引で恣意的な思考停止の下で行われている。だから、このような内容に話が及んだときに、「それは難しい」と言って問題から回避しようとする人が出てくるのは、当に「思考停止」の表れである。筆者を含め、このような思考停止の思考性から脱却し、多様な性別を容認した上で、他者の性別を規定しないことが、これからの社会への重要な課題であると筆者は考える。

5 終わりに――セルフヘルプグループの問題点

「言いつぱなし」、「聞きっぱなし」という、一見開放的に思われるセルフヘルプグループのルールにも問題点はある。そこで最後に、そのようなセルフヘルプグループの問題点に触れておく。

① ローカルな言語による「医療化」

性同一性障害・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加すると、当事者特有のローカルな言語が使用される。そのローカルな言語は、ホルモン投与や手術などの医療行為によるもの（医療化）から派生する性質を持つものが多い。

たとえば、「ホル注（ホルモン注射）」という言葉は、当に「医療化」から派生した言葉の代表例である。また、「パスする（服装や持ち物などで、自己の希望の性別と一致しているように見られること）」、「リードされる（体の性別で判断されること）」などの言葉は、その言葉自体、一見すると医療化とは無関係に思われるが、視聴覚レベルで性別を規定されるという行為の中に、ホルモン投与や手術などの医療的側面も含まれているので、間接的な「医療化」から派生した言葉であると言えるだろう。

性同一性障害・トランスジェンダーのセルフヘルプグループに参加している当事者たちの多くは、このような医療化から派生したローカル言語を「知っていて当然」というように使用している。しかし、当事者たちの中には、体の性別に違和感があっても、あえて「性同一性障害」と位置付けたくない、つまり、そのような自己を「医療化したくない」という人もいる。そのような当事者たちにとっては、このセルフヘルプグループが息苦しくなって去っていくことも多い。

筆者が参加したいくつかのセルフヘルプグループでも、グループ全体が医療化されていることを自明視している感が強かった。今後のセルフヘルプグループのあり方として、「医療化を嫌悪する当事者への配慮」が必要である。

② 「言いつぱなし、聞きっぱなし」の弊害

セルフヘルプグループのルールとしての「言いつぱなし、聞きっぱなし」は、一見すると緩やかなつながりのように思われる。しかし、このルールには、2つの問題点がある。

第1に、「言いつぱなし、聞きっぱなし」の持つ一見自由な性質を持つ相互行為ではあっても、そこに必ず自己の価値観や思い込みを強制してくる当事者がいる。そのような当事者に対して、自己の意見を提示することができずに去っていく当事者も多い。

第2に、「言いつぱなし」の場面では自己の体験を際限なく語るが、逆に「聞きっぱなし」の場面では、他者の体験を聞くことができずに言葉をさしはさみ、発言している当事者の気分を害

する当事者もいた。このため、一見自由な「言いつばなし、聞きつばなし」のルールはものもの見事に無視された。その結果、当事者同士のつながりを難しくしている側面を垣間見ることができた。筆者はこのような体験を通して、現在はセルフヘルプグループには参加していない。

③セルフヘルプグループから去っていった当事者たちを、どのようにサポートするか

そこで浮かび上がってきた課題は、「何らかの理由でセルフヘルプグループから去っていった当事者たちをどのようにサポートするか」である。この場合、新たなセルフヘルプグループを立ち上げたり引き戻したりすることは、②で示した「言いつばなし、聞きつばなし」による弊害を招く恐れがあるので得策ではないと筆者は考える。

何らかの理由で、セルフヘルプグループから去っていった当事者たちは、往々にして社会から孤立してしまうことが多い。その孤立をどのように防ぐかが、今後の重要な課題であろう。